ヤポンスキー！　ヤポンスキー！！と菅さんは叫んだ

弁護士　大澤 隆司

今から約50年ほど前だが、国鉄（現在はJR）の環状線福島駅ホームから転落した視力障害者の事件を受任した。
当時、修習生だった下村忠利君に協力を依頼し、１年間の調査の後、国賠訴訟（大原国賠訴訟）を提起した。
このとき、私が弁護士３年目の若輩だったので、菅先生（先輩の大弁護士なので、先生という呼び方をするべきだろうが、親しみを込めて「菅さん」と呼ばせていただく）にも参加していただいた。
私がお願いしますと頼んだ記憶もないので、弁護士３年目の大澤だけでは頼りないと思った誰かが、面倒みてやれと菅さんに言ったのだろう。
控えめな方で、私たちが書いた準備書面はほとんどフリーパスだったが、時として《こうしたらいいのじゃないか》という適切なアドバイスをいただいた。
控訴審以降は、まあ大丈夫だろうと思われたのか、私や下村、高木甫、浅野省三の若手弁護士だけで担当することとなった。
あるいは、裁判所の構内で毎回デモし、法廷で車椅子の台数制限をする裁判所職員と大喧嘩をする過激派？弁護士には付き合いきれないと思われたのかもしれない。
ただ、今、思い返してみると、本当にお世話になったのに、大原国賠での菅さんの記憶があまり残っていない。
私にとっての菅さんの記憶はソ連旅行だ。
1990年、下村君が《大澤さん、ソ連旅行に行かんか？今年が最後の軍事パレードになるかもしれんで》と言ってきた。
（彼は京大新聞のキャップをしていたようで、その嗅覚は確かであった。翌年、ソ連は崩壊した）
旅行は菅さん、浦先生（浦先生も親しみをこめて「浦さん」と言わせていただく）、私、下村君の４人であった。
ソ連ではいろんなおもしろい経験があった。
空港におりたとき、銃（カラシニコフ銃だったろうか）を構えた兵士の出迎え？を受けたことにショックを受けた。
レニングラード（現サンクトペテルブルグ）の街頭カフェでコーヒーを飲みながら見た、路上を行きかう若い女性が皆、きれいに見えた。
ホテルの食事は粗末であったが、お金を出せばレストランで豪華な食事ができ、しかもジャズさえ聴くこともできた。
ただ、客が革命歌である《インターナショナル》をリクエストしたとき、ジャズメンが断固として拒否したことも印象深い。
この旅行で、菅さんが特に印象に残っている場面が２つある。
エルミタージュ美術館に行ったとき、美術館の観客を監視するおばあさんが私たちに話しかけてきたである。
《×○☆△□・・・・・・》
（おそらく、どこから来たんだ、お前たちは何国人なんだと聞いたのであろう）
菅さんが答えた。
《ヤポンスキー》
おばあさんは笑顔になり、
《○×□☆△・・・・・・》
（おそらく、遠いところからよく来たなぁと言ったのだろう）
と言って、抱きかかえるようなしぐさをした。

このとき、ヤポンスキーと即答できる菅さんってすごいなぁって思った。
そういえば、街を小型バスで移動しているとき、菅さん（あるいは浦さんだったかもしれないが）が看板を見ながら辞書を引いていたのを見て、わぁー、こんなところで勉強しているだと驚いた記憶も残っている。
さて、モスクワの革命記念日の軍事パレードも見た後、帰国するために空港にいた時である。
近くで悲鳴が上がった。
小柄でやや浅黒い人たちが警棒で殴られていた。
ベトナムの人という感じだった。
殴っているのは私服の警官のようであり、かなり興奮していた。
私たちもその騒ぎに巻き込まれそうになった。
そのとき、菅さんは腕をスーと前に伸ばした。
その先に日本のパスポートがあった。
そして言ったのである、
《ヤポンスキー！　ヤポンスキー！！》
あれほど見事な対応を見たのは、これまでの生涯で１度たりとも存在しない。
今、何が起こっており、どう対応するべきかを菅さんは一瞬で判断し、かつ即刻、行動したのである。
ソ連旅行の後、菅さんとあまり話をしたことがない。
互いに京阪沿線に家を持っているので、朝、北浜の駅で見かけることもあった。
ただ、知的でクールな菅さんにはやや近寄りがたい雰囲気があった。
挨拶程度の言葉を交わすだけであった。
今回、菅さんの訃報を知った。
浦さんの追悼文を読ませていただいた。
国際的な活動をされていたという。
そこには私の全く知らない、菅さんの活動があった。
もう少し話を聞かせてもらった方がよかったなぁという心残りがある。
本当に惜しい人を亡くしたという気持ちが消えない。

写真はソ連旅行の際の写真。レニングラード（現サンクトペテルブルグ）のロモノーソフ橋での菅さん